

「とりつくるひかゝはる」考：『蜻蛉日記』本文批判

今西，祐一郎
九州大学教授

<https://doi.org/10.15017/8944>

出版情報：語文研究. 94, pp.53-62, 2002-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

「とりつくろひかゝはる」考

—『蜻蛉日記』本文批判—

—

本文校訂にあたっては、安易に誤字、脱字等を想定して本文を改変してはならない。だが、本文の文字列がとりあえず意味をなしているからといって、一途にそれに従えばよいというものでもない。

『蜻蛉日記』から一例を挙げれば、安和二年、世に言う安和の変によって失脚した左大臣源高明の北の方に見舞いの長歌を贈った道綱母に、北の方から届けられた返歌が、

いとぎなきてして、うすにひのかみにてまつのえたにつ
けたまへり。

今西祐一郎

という状態で届けられたことを記す。問題は「いとぎなきて」にある。「いとぎなきて」は、「幼い筆跡」という意味にとれるが、高明北の方は子供ではなく、また筆跡の不熟をことさらに言い立てられている人物でもない。筆跡がその人の教養と不可分に考えられて重視された時代に、道綱母が好意をもつて接している左大臣の北の方の筆跡を「いとぎなし」と評するのは、どう考えても不自然である。「いとぎなき」という文字の連なりは国語として意味をなしているけれども、その意味は文脈に適合するとはいえない。

そこで『蜻蛉日記』のいくつかの写本についてみるに、桂宮本ではたしかに「いとぎなき」とは読めるものの、「いとぎ」の「ぎ」は「支」を字母とする仮名で、「に」「や」「女」に紛れやすい字形が用いられており、現に国会図書館本、無

窮会神習文庫本、松平文庫本などではその箇所は「いとよなき」である。

「これまで「いとよなき」と読まれてきた文字列中の「き」が、「よ」「や」「に」と紛らわしい字体であるならば、この場合「き」以外の可能性についても一考すべきではあるまいか。もつとも「いとよなき」では意味をなさない。では「いとよなき」ならどつか。これは「二つとない」を意味する「二なし」という形容詞を副詞「いと」で強調した表現で、「うつほ物語」や「源氏物語」にも見出される言い回しであった。そして何より「いとよなき」は『蜻蛉日記』の当該箇所にもつともふさわしい表現であるということができ^(半)る。

転々書写を経て本文の変動少なからぬ中世、近世の写本に対して、千年前の言葉に対する感覚の鈍さから、その文字面を墨守して事足れりとする解釈が、まだまだ横行しているのではあるまいか。

二

『蜻蛉日記』 上巻 康保三（九六六）年秋に、次のような記事がある。母の死後、兼家の訪れも間遠になり、父倫寧はここ十年余り国司を歴任し、在京時も道綱母邸とは別の邸に

住む生活、そのような状況下の人手を欠いて屋敷の整備もままならぬ道綱母邸の有様を述べる一文である。

かゝる所もとりつくろひかゝはる人もなければいと悪しくのみなりゆく。これをつれなく出で入りするは、ことに心ほそ思ふらんなど深う思ひよらぬなめりなどぢくさに思ひ乱る。

問題は、「邸の手入れをする」意で用いられている「とりつくろひかゝはる」という言い回しに含まれる、「かゝはる」という語にある。「邸の手入れをする」というような意味は、「通常」とりつくろふ」だけで事足りるのである。たとえば「源氏物語」橋姫巻で、時勢に見放され落魄した八宮邸の様子は次のように述べられる。

家司なども、むねむねしき人もなかりければとりつくろふ人もなきままに草青やかにしげり、軒のしのぶぞ所え顔に青みわたれる^(半)。

また、『蜻蛉日記』では、同様な意味を表す場合、たんに「つくろふ」というのが普通であった。

もろともに出であつゝつくるはせし草なども、わづらひしよりはじめてうち捨てたりければ生ひ凝りていろくに咲き乱れたり。

(康保元年七月)

先つ頃、つれぐなるまゝに草どもつくるはせなどせしに、あまた若苗の生ひたりしを取り集めさせて……。

(天禄元年六月)

撫子の種取らんとしはべりしかど、根もなくなりにけり。呉竹も一筋倒れてはべりし。つくるはせしかど。

(天禄二年六月)

(宇治ノ院八師氏方) あはれに心にいれてつくるひ給ふと聞きし所ぞかし。

(天禄二年七月)

とすれば、かの箇所のみが、何故「とりつくるひかゝはる」というような表現になっているのか。「かゝはる」を添え、それによつて「とりつくるふ」や「つくるふ」だけでは表現できないような内容を述べているとは思えないのであるが、

この「とりつくるひかゝはる人」は、これまでの注釈では、

修繕し、世話をする人

(日本古典全書)

修理し、気にかけてくれる人

(全注釈)

修理し世話してくれる人

(全集)

という風に解かれて、「かゝはる」が添えられていることに対しては、格別な注意が払われることはなかった。ただ、日本古典文学全集が頭注で「かかはる」について、「関係する」の意。和文には珍しい語」と指摘しているのは注目される(後述)。

このような『蜻蛉日記』注釈の大勢を承けて、国語辞書にも「かかは(わ)る」の用例として、この『蜻蛉日記』中の唯一例を、次のような意味の初出として掲出するものが出現した。

ある関係を持つ。世話をしたり、仕事に従つたりして、他とかかわり合いになる。

(日本国語大辞典)

関係を持つ。世話をしたり干渉したりする。

(角川古語大辞典)

関係する。かかわりあふ。たずさわる。

(広辞苑 第三版以後)

この現象は、おそらく戦後の『蜻蛉日記』研究の成果を反映するものである。『広辞苑』は、昭和三十年の初版では、上記の「関係する。かかゝりあう。たずさわる」という定義を記すのみで、用例として『蜻蛉日記』を掲げてはいなかった。その状態が第二版（昭和四十四年）、第二版補訂版（昭和五十一年）まで継承されていたのである。しかし、昭和四十八年刊の『日本国語大辞典』が、『蜻蛉日記』を用例に掲げて以降、五十七年刊の『角川古語大辞典』、五十八年刊の『広辞苑』第三版が相次いでそれに倣った。

なにゆえ、これら昭和四十年代から五十年代にかけての辞書において一斉に『蜻蛉日記』の用例が掲げられるようになったのであろうか。

その背景には、伊牟田経久氏の、精密な校訂本文に基づく『蜻蛉日記総索引』（昭和三十八年）、ついで柿本獎氏の、詳細な索引を備えた『蜻蛉日記全注釈』（昭和四十二年）の完成がある。これらの成果が、用例検索の便をはかるのみにとどまらず、古写善本に恵まれない『蜻蛉日記』本文の信憑性を高め、辞書の用例への利用の途を拓いたのだと思われる。

このような情勢のもとで、「かゝはる」も「関係する、かかゝりあう」意の初出例として辞書に掲出する保証を与えられたのではなかったか。

三

戦後、前記の二書をまつまでもなく、「日本古典全書」、「日本古典文学大系」の刊行などによって、昭和三十年代から四十年代にかけて、『蜻蛉日記』注釈の水準が上がったことは確かである。だが、それはあくまで全般的に見た水準の向上であって、箇々の問題一つ一つが、ひとしなみに精密に検討されたわけではない。当面の「かゝはる」も、『蜻蛉日記』の用語として十分に吟味されてきたとは必ずしもいえない語であった。

それは、この「かゝはる」が、現代語にまで存続している語であると同時に、現代語の感覚、すなわち「関係する」とか「世話をする」という風に理解しても一応意味が通るような文脈に置かれていたからであらう。意味不明の本文の少ない『蜻蛉日記』にあつて、それは看過されてもやむを得ない一語であつたのかも知れない。

しかし、『蜻蛉日記』の時代、「かゝはる」は、はたして今日と同様、「関係する」とか「世話をする」の意で使用される言葉だったのであろうか。このことを考えるに当たって留意すべきは、「かゝはる」について施された、日本古典文学

全集の頭注、「和文には珍しい語」という指摘（前述）である。

ここにいう「和文」が平安時代の仮名文を指すとすれば、たしかに『竹取物語』、『土佐日記』、『伊勢物語』の初期仮名文以下、『うつほ』、『落窪』、『源氏』、『狭衣』の作り物語、『栄花物語』、『大鏡』の歴史物語にいたるまで、「かゝはる」の用例は皆無である。とすれば「珍しい」は、用例が少ない故に「珍しい」のではなく、平安時代の和文には見出せないという意味で「珍しい」というべきか。「関係する、世話をすする」の意の古い用例に、古語辞典、国語辞典が申し合わせたように、『蜻蛉日記』の当該例を掲出するのは、平安、鎌倉期を通しておそらく他にその例が見いだせなかったからである。

そして、この『蜻蛉日記』にただ一例のみ見出される「かゝはる」が、文献中でいかに孤立した用例であるかは、この意味で掲出される他の用例が、『コンテンツスマンチ』や天正九年の『吉川家文書別集』（日本国語大辞典）や『日葡辞書』など、『室町時代末期まで下がることから窺われるであろう。しかし、意味を問わなければ、「かゝはる」という語は平安時代でも珍しい語ではなかった。「和文に珍しい語」であったのは、それが和文とは位相を異にする漢文訓読語に用

いられる語だったからである。

すなわち、「かゝはる」は「拘」や「繫」等の訓として用いられる語で、和文の「かゝづらふ」に対応する「訓讀特有語」である（築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』一九六三年、東京大学出版会）。それは、築島氏の掲げた用例から借用すれば、

諸異生拘煩惱故（諸ノ異生ノ煩惱ニカゝハレタル力故二）
（吉水蔵成唯識論卷第八寛治五年頃点）

のように用いられて、物事にとらわれ左右される情況を表す語であった。

「かゝはる」がこのような意味の語であるとすれば、

かゝる所もとりつくろひかゝはる人もなければ、

という一文は、字義通り解すること容易ならざる表現だといわざるをえない。

前述のように、平安時代の仮名文では、『蜻蛉日記』の当該例が唯一の孤例であるが、中世の文献になると「かゝはる」

はしばしば見出される。しかしそれらは、たとえば、

定業猶医療にかゝはるべう候ば、豈釈尊入滅あらむや。

(平家物語 卷三)

すなわち「あらかじめ定まっている寿命が医療によつて左右されるものならば、どうして釈迦が命を終えられることがあろうか」のように、漢文訓読の際と同じ意味で用いられているのである。

彼此共に賤郎の身なりといへども、あやまたで補佐の臣にいたる。賢才かゝはらざるゆへ也。

(十訓抄 第三・一六話)

これは、「傳説、呂尚はともに出自卑賤であつたが、道を誤らず天子補佐の任に昇つた。賢人は出自に拘り左右されたりしないからである」の意。以下、中世の説話、軍記の類に相当数見出される「かゝはる」はいずれも漢文訓読に用いられた原義を離れることなく、単に「関係する、世話をする」等の今日的な意味での使用は見られない。この事実は「蜻蛉日記」の「かゝはる」の存否にも影響を及ぼすはずである。

是は目にも見えず、力にもかゝはらぬ無常の殺鬼をば暫時もたゝかひかへさず。

(平家物語 卷六)

…と固く制しければ、資忠、涙を押さへて力無く着たる鎧を脱ぎ置いたり。聖、さては制止に關はりぬと嬉しく思ひて、

(同 卷六)

兵革しばらく静まり、天下無為に属すと言へども、京中の貴賤はなほ困窮の愁へに關はれり。

(太平記 卷二四)

公武の成敗關はるところ無ければ、山門の安否この時にありと、老若共に驚嘆す。

(同 卷二四)

狼藉手に余りて制止に關はら、獅子・狛犬をうち割りて薪とし、仏像・経巻を売りて魚鳥を買ふ。

(同 卷三四)

他には仏神敬はず朝夕狩り漁を業とす、内には將軍の仰せを軽くして毎事成敗に關はら。

(同 卷三五)

又大乗ノ学者八因果ヲワキマヘス律制ニカヽハラストテ
偏ニ外道ノコトク思ヘリ。
(沙石集 卷四)

大乘ハ心ヲ達スルヲ本トス。形服ニカヽハラス。(同)

文字ニカヽハラス手ニマカセテ取来コトハ是ニ似タレト
モ、愚癡ノ程オカシクコソ。
(同 卷七)

折ヲシリ時ニ随テ格ヲコエ禮ニカヽハラスシテ物ノ意ヲ
得テ振舞、コレ誠ノ達人也。
(同 卷十)

諸道ノ達者、ソノ道ノ意ヲ得者カナラスシモ師説ニカヽ
ハラストイヘリ。
(同)

コレコソ格ニカヽハリテフルマヒタラマシカハ、ヤカテ
ソウトマレナマシ。格ヲ越テ還テ格ニアタリテ祈念モ叶
ヒケルナルヘシ。
(同)

いずれも和漢混淆文における用例であつて、純粹の和文に
は見られないという現象に注目したい。

このような「かゝはる」の分布を視野にいれると、時をさ

かのぼつた平安時代に、しかも純粹の和文たる『蜻蛉日記』
における「かゝはる」の孤例は、国語史の流れに逆らつて、
あたかも飛び地のような觀を呈する。それは国語史にそぐわ
ない、はなはだ不安定な一語だとはいえないであらうか。今
日に残された写本からは明らかに「かゝはる」と読めるもの
の、それが本来の『蜻蛉日記』の用語であつたかどうかは大
いに疑問である。

四

これまで見てきたように、『蜻蛉日記』における、「關係す
る、世話をする」という意味の「かゝはる」という語の存在
が疑わしいということになれば、その解決策の一つとして本
文改訂の可能性を探ることも許されるであらう。

板本文文に対する数多くの改訂書き入れによつて、以後の
『蜻蛉日記』研究に多大な寄与をした契沖も、この「かゝは
る」については書き入れを残していない。「かゝはる」に改
訂案を示したのは『かげろふの日記解環』である。『解環』
は「かゝはる」を「かゝづる」と改めたのであるが、前節に
見たような「かゝはる」という語の訓点語としての性格を考
えれば、その当否はともかく「かゝはる」という本文に疑義

を呈した点は評価に値する。

しかし、それが、築島氏が指摘した「かゝづらふ」ならばともかく、古い用例の見えない「かゝづる」という語であること、また、仮に語としての「かゝづる」を認めるとしても「ものごと」に拘る」といふその語の意味では文脈に適合するとはいいがたい、という二点で、それに従うのは躊躇される。

『解環』とは別個の改訂案を模索する必要がある。

さて、本文系統を異にする異本の存在しない『蜻蛉日記』においては、その改訂の拠り所は、先の『かげろふの日記解環』がその凡例で、

ソノ求ムベキ手ヨリハ、万ノカナノ転訛セルヨリオシハカリテ、ヤゝ本ニ復サンヨリ外ニ又術ナキコト治定セルニヨリテナリ。

と述べ、それを支持する柿本奨氏が、『蜻蛉日記全注釈』の解説で、

この日記の本文の乱れは、文字、とくに仮名の書体転訛によるものと考えられるので、その仮定の上に立って「オシハカリテ」すなわち推測によって本文批判する。

と敷衍した、字体転訛の類型以外にない。

前述『解環』がこの「かゝはる」を「かゝづる」と改めたのは、「ハ」が「ツ」に紛らわしい字形であることに基づく処理で、字体転訛の観点からだけなら一理ある改定案であった。

したがって、『解環』を超える改定案を出すために、まずは桂宮本の字体を見ることにしよう。^(注)



字体を熟視すると、「かゝはる」の「かゝ」二字から、「天」を字母とする「て」、もしくは続け書きされた「つゝ」が連想されるのは僻目であろうか。また「は(者)」「は、見よう」^(注)については「み」または「見(み)」「の崩れた形にも見える。実際「み」を「は(者)」「に誤ること、桂宮本において他にも見出される。すなわち中巻天禄二年六月の記事中、

とみに物もいはず。

の「とみに」は、現存諸本ではすべて「とはに」となっている(『蜻蛉日記全注釈』付載「誤写一覽」)。しかもその「は

は、桂宮本以下の主要伝本では一様に「者」字母である。

かゝる所もとりつくるひて(つゝ)みる人もなければ悪
しくのみなりゆく。

(桂宮本)

「かゝる」の場合も、「は」は諸本おおむね「者」字母であり、あるいはそこに諸本の共通祖本の面影を見ることができるとも^{注1)}されない。

かゝる所もとりつくるひて

(彰考館文庫本)^{注5)}

かゝる所もとりつくるひて

(阿波国文庫本)^{注6)}

かゝる所もとりつくるひて

(神宮徴古館本)^{注7)}

このような事例を念頭に置くと、「とりつくるひかゝる」が「とりつくるひてみる」あるいは「とりつくるひつゝみる」から発生した字形ではないか、と推定することもあながち無

謀とはいえまい。そしてその文章が、

かゝる所もとりつくるひて(つゝ)みる人もなければ悪
しくのみなりゆく。

であれば、従来「かゝる」という訓読特有語に強いて後世風の意味を当てがって文脈に適合させてきた、「(母の死後)人手の乏しくなった道綱母邸を手入れして管理する者もいないので」という文意が、この改訂本文からは無理なく読み取れるであろう。

以上、改訂の私案を提出し、大方の批判を仰ぎたい。

注1 今西祐一郎「歌・家集・蜻蛉日記」(新日本古典文学大系・土

佐日記 蜻蛉日記 紫式部日記 更級日記) 解説 一九八九年)

注2 ただし大島本は「なかりければとりつくるふ人も」の部分を

欠く。したがって大島本本文に基づいて作られた『源氏物語大成』索引篇には、「とりつくるふ」の語は見出されない。

注3 以下、桂宮本は笠間影印叢刊による。

注4 他に、大東急記念文庫本、無窮会神習文庫本、岡山大学本も

同様。ただし国会図書館本は「は」同じく「者」字母であるが、「かゝる」の「か」が「加」字母であり、本稿の観点か

らは、さらに字母変化を蒙った表記ということになる。

注5 国文学研究資料館のマイクロフィルム紙焼きによる。

注6 山田清市『阿波国本 蜻蛉日記』(桜楓社)による。

注7 日本古典文学会刊の原装複製本による。

(いまにし ゆういちさう・本学教授)